

公開講演会記録

歴史に翻弄された溥儀、溥傑兄弟の生涯

『転生―満州国皇帝・愛新覚羅家と天皇家の昭和』

ジャーナリスト 牧 久



私は歴史学者でも歴史研究者でもない。ひたすら事件・事故を追ってきた元新聞記者である。そんな私が、長年にわたって集めた史・資料を丹念に読み解き、満州国皇帝となった清朝のラストエンペラー・愛新覚羅溥儀と弟の溥傑の生涯を追ったノンフィクション『転生―満州国皇帝・愛新覚羅家と天皇家の昭和』（小学館）を上梓した。

タイトルの「転生」とは「生まれ変わる」という意味である。溥儀、溥傑の生涯を追うと、歴史の荒波に翻弄され、あたかも長編の人間ドラマのように、次々と新しい「人間」に生まれ変わっ

ていく姿が浮かび上がってくる。その数奇な生涯は小説の世界をはるかに超えていた。

「歴史の定説」への疑問

かつて私は「満州国」に関わった人物の評伝を二冊書いた。『不屈の春雷―十河信二とその時代』と『満蒙開拓、夢はるかなり―加藤完治と東宮鐵夫』である。「新幹線を作った男」として知られる元国鉄総裁の十河は、満鉄理事時代に関東軍参謀の石原莞爾と意気投合し、石原らが満州事変をきっかけに建国した「満州国」の長期経済計画

の立案に携わった。一方、『満蒙開拓、夢はるかなり』は、厳冬期、零下四十度にもなる厳しい風土の満州北部を豊かな農村に変えたいという志を掲げて、それに取り組んだ寒冷地農業の研究者、加藤完治と彼を支援した東宮鐵夫の物語である。東宮は石原莞爾の部下でもあった。

彼らには、軍閥が割拠し内戦状態になっていた満州を中国本土から切り離し、理想の「楽土」を建設するという思いがあった。しかし、やがて満州国は変質し、ソ連軍の侵攻により、悲惨な終末を迎える。彼らの思いは「侵略

行為」として批判され、歴史の底に埋もれてしまった。二冊の執筆に当たって「かつての満州国」での現地取材を繰り返し、日本側だけでなく、満州国側の史・資料を多数集めたが、文献類のほとんどは執筆に生かせず、書棚に積み上げられたままになっていた。

そうした文献を読み返してみると、今度は満州国を日本側からでなく、満州国皇帝となった「ラストエンペラー」、愛新覺羅溥儀とその実弟、溥儀の眼を通して記述したい、という思いが募った。私が住む千葉市・稲毛には陸軍歩兵学校に通っていた溥儀が公家の娘、嵯峨浩との新婚時代に半年間を過ごした住居がそのまま保存されていて、この仮寓をしばしば訪れるようになったことも執筆の強い動機の一つになった。

「満州国」はご承知のように、中国の東北部、万里の長城の向こう側に存在した国家である。昭和七年に建国され、終戦の年の昭和二十年八月に消滅した。国家として存在したのはわずか、十三年五か月。満州国は満州事変を起こした関東軍が、清朝のラストエンペ

ラー・溥儀を拉致同然に連れ出し、皇帝に担ぎ上げた日本の「傀儡国家」だったというのが、私たちが教わった歴史の「定説」になっている。満州国皇帝となった溥儀と弟の溥儀は、「傀儡師」である関東軍の意のままに操られ、踊らされただけの「木偶の坊」に過ぎなかったのだろうか。「満州国」は今の中国では「偽満洲国」と呼ばれ、日本軍の中国侵略によってできた「うそ、偽りの国家」としてその存在は否定されている。それはなぜか？ 満州国の存在を認めると、その国家を潰したのはどれか、という議論に発展するからであろう。私は「満州国」について、これまでの定説に囚われることなく、溥儀・溥儀兄弟の生涯を描くことによって「満州国」とは何だったのか、を追求してみたいと思った。

清朝復興を目指した溥儀兄弟

日本の昭和初期、東北地方では冷害が続き、食べられない農家の次男、三男たちが満州の最北端まで行って凍土を開墾して農業を始めた。私は『満蒙

開拓、夢はるかなり』でそうした開拓民の姿を描いた。その取材では哈爾濱（ハルビン）から夜行列車で八時間、ロシア国境に近い終点の佳木斯（ジャムス）で降り、日本人開拓民が最初に入った弥栄村、千振村を訪れた。その当時、満州とはどんなところだったのか。作家、小川哲氏の直木賞を受賞した『地図と拳』（集英社）は満州で最初に地図を作り、都市を建設した日本人の物語である。その小説の中に当時の満州の状況を表すうまい表現がある。

「満州は少しずつ発展していたが、すべてが思ったように進んでいたわけではなかった（『中略』辛亥革命によって清は滅び、中華民国が誕生していたが、彼らも広大な満州の統治に苦心していた。満州はまだ、誰のものでもなかった。広大な白紙の地図を、馬賊がゲリラ的に埋めていた。台頭した馬賊が別の馬賊に敗れ、勢力圏は目まぐるしく入れ替わった。日本が、支那が、そしてロシアや諸外国が有力な馬賊を懐柔しようと試み、それに成功したり失敗したりした」。

昭和六年九月の満州事変を主導した
関東軍参謀・石原莞爾は、当初「満蒙
問題の解決はわが領土とする以外にな
い」（『満蒙問題私見』）という「満蒙
領有論」だった。だが年が明けた昭和
七年になると、彼は「満蒙各民族によ
る自治国家建設」へとその考えを変え
ていく。「第一の理由は満蒙各民族に
は自治能力があることを知ったことだ
と彼は後に述懐している。新国家建設
を協議した「東北最高行政委員会」に
は、張作霖亡き後、『満州四巨頭』と
呼ばれていた張景恵、馬占山、臧式毅、
熙洽らが集まった。実力者で参加しな
かったのは、父親の張作霖が殺され、
蒋介石と手を結んだ張学良だけだった
と言ってもよい。四巨頭は新国家が建
設されるとそれぞれが閣僚級の重要ポ
ストに就いた。

関東軍に拉致同然に満州へ連行され、
皇帝の座についたとされる溥儀だが、
彼には逆に「関東軍を利用して清朝を
再興する」という強い思惑があった。
ご承知のように清朝最後の皇帝「宣統
帝」が溥儀である。溥儀は二歳で皇帝

となり、六歳の時に起きた辛亥革命で
皇帝の座を降りた。清朝の復興には強
い軍隊が必要になる。溥儀の強い願い
を実現するために、日本に送り込まれ
たのが弟、溥傑だった。昭和四年に來
日した溥傑は四年間、学習院で学んだ
後、陸軍士官学校に入り、優秀な成績
（銀時計組）で卒業する。さらにその
後、千葉にあった陸軍歩兵学校、さら
に陸軍大学へと進み、満州国軍の優秀
な士官となった。

溥儀の側近たちの証言

溥儀・溥傑に関する史・資料につい
て述べておきたい。溥儀は『わが半生――
満州国』皇帝の自伝、溥傑は『溥傑
自伝――満州国』皇弟を生きて』とい
う自伝を書き残している。これらの自
伝は二人が戦後、中国・撫順の戦犯管
理所に収容され、思想改造教育の一環
として自分の半生を綴った「認罪書」
がその「原典」である。出版時に事実
関係の再確認はなされたとはいえず、二
人がその時々になぜ、そのような行動
をとったのか、どう思ったのか、など

についてはチェックされていないし、
確認のしようがない。もちろん、事実
の歪曲も含まれている。『溥傑自伝』
はかなり正確に記されているが、『わ
が半生』には自己を正当化するための
ウソがたくさんある。

そこで重要になるのは、彼の「腹心」
だった人物たちが語る証言である。満
州国で溥儀が信頼した日本人が三人い
た。一人が満州浪人の工藤鉄三郎。溥
儀から「忠」という名前を与えられる
ほど側近中の側近だった。青森県出身
の工藤は若き日、陸羯南の感化を受け、
サハリンから中国大陸にわたり、飴売
りなどで生活費をかせぎ、中国語を身
につける。溥儀が大正六年、「張勳に
よる復辟（退位した君主が再び位につ
くこと）」で十二日間、皇帝の座につ
いた時、溥儀に接近して信頼を勝ち得、
満州国が建国されると、侍従長相当の
ポストについた。彼は戦後『皇帝溥儀』
を上梓するが、そのサブタイトルは
「私は日本を裏切ったか」である。

上海の東亜同文書院出身で、外務省
のノンキャリア通訳だった林出賢次郎は

「日満議定書」の調印式での通訳に当たったが、その見事な通訳ぶりに溥儀がほれ込み、請われて満州国に出向し、溥儀と日本人との会見の通訳を務めた。

そのやり取りは「極秘」とされたが、林出は外務省に密かに要請され、「厳秘会見録」として外務省に送り続ける。林出が通訳を務めた五年間の全記録が今も外務省外交史料館に保存されている。

もう一人、溥儀が陸軍士官学校在学中、教官として彼を指導した吉岡安直（終戦時、中将）がいる。溥儀は在学中、休日になると吉岡の自宅を訪問、吉岡夫妻を実の両親のように慕った。その縁もあって溥儀が帰国すると満州に渡り、溥儀の御用掛と関東軍参謀を兼務し、溥儀の信頼も厚かった。しかし、終戦後、ソ連の捕虜となった溥儀は、東京裁判にソ連の証人として出廷。「私が満州国皇帝として語ったことは、すべて吉岡が書いたものだ。吉岡は常に背後から私に短銃を突き付け、読むことを強制した」と繰り返して証言する。当時、吉岡は溥儀たちと切り離され、戦犯としてモスクワの獄中にあり、そんな証言も知らずに寂しく獄中死する。

溥儀最大の錯覚「天皇は兄弟」

溥儀は満州国皇帝になって日本を二度、訪れている。最初が昭和十年四月。日本は大連まで迎える戦艦「比叡」（艦長・井上成美大佐）を送り、横浜に上陸した溥儀一行を東京駅では天皇陛下以下各皇族、全閣僚が出迎え大歓迎する。この日本訪問に同行した通訳の林出賢次郎は全行程を詳しく書き残している。

溥儀が日本滞在中もとても感銘を受けたのは、大宮御所で溥儀を歓待した貞明皇太后である。母親の愛情を知らずに育った溥儀は、貞明皇太后の心こもった歓待に「私はついに最大の錯覚を起こした」と述べるほど、貞明皇太后を母親と思うようになったのである。そして清朝復辟という長年の夢は「日本の天皇家との一体化」に向けて走り始める。帰国した溥儀は「訪日から帰国して国民に与える書」を渾身、「朕は日本天皇陛下と精神一体の如くである」と述べた。これに異議を唱えたのが清朝時代からの腹心で、清朝復活を志してきた鄭孝胥総理である。溥儀はすぐさま鄭総理を解任し、新総理に張景恵を指名した。彼は満州馬賊の一人で、張作霖と義兄弟の契りを結んで行動を共にし、張作霖爆殺事件が起きた時には、同じ列車に同乗しており、重傷を負ったが命は助かった。満州事変が起きると関東軍に協力、満州建国の功労者の一人となった。

二度目の訪日は昭和十五年六月である。この訪日で溥儀は「天皇と兄弟の証」である三種の神器を強く所望する。訪日に先駆け、御用掛の吉岡安直を東京に派遣、日本政府や宮内省と交渉させた。しかし、天皇をはじめ日本側はこれを断った。断られた吉岡は、京都の鏡師に銅鏡の製作を依頼して帰国する。溥儀は『わが半生』に「天皇に三種の神器を見せられた」と記し、「こんなものは北京の骨董市にいけばいくらでもある」と書いている。この時、天皇が溥儀に与えたのは太刀一振りとお襖一枚だった。

溥儀は帰国途中、伊勢神宮に立ち寄

り、吉岡が京都の鏡師に作らせた銅鏡のお祓いを済ませ、帰国後、新京に建設した「建国神廟」に祀った。この建国神廟も日本が溥儀に天照大神を押し付け、祀らせた、というのが日本での定説となっている。溥儀には「天皇と兄弟なら、天皇に忠実な日本人官吏も軍人も自分にひれ伏すだろう」という思惑があったのである。

満州国を建国した関東軍では、新国家を維持・継続させるために溥儀の後継が大きな問題になる。溥儀は十四歳で婉容と結婚、側室に文繡を迎えたが、彼は女性に興味がない。苦しんだ婉容はアヘン中毒となり、文繡には離婚訴訟を起こされ敗訴する。後継の子どもが生まれることは絶望的であった。関東軍は溥儀の後継者問題に頭を悩ませる。そこで浮上したのが弟・溥傑の結婚問題である。

関東軍は溥傑と日本人女性を結婚させ、男の子が生まれたら次の皇帝とする、という陰謀をめぐらせた。選ばれたのが嵯峨家の長女・浩である。嵯峨家は明治天皇につながる家系である。

政略結婚（昭和十二年）だったが、二人は見合い写真で互いに一目ぼれし、終生、「相依為命」（相依って命を為す）というほど相思相愛の仲になる。二人の子どもが生まれたが、二人とも女性であり、長女・慧生は学習院大学二年生の時、天城山中で同級生と心中、全国的に大きな話題となった。

溥儀たちをソ連に売ったのは誰？

昭和二十年八月九日、ソ連軍の満州侵攻が始まると、満州国は首都を朝鮮との国境に近い山中に移した。日本の敗戦が決定的になると、溥儀一家は近衛文麿なども動いて京都に亡命することになる。迎えの飛行機は同十九日、朝鮮の平壤に来ることになっていた。だが、直前になって奉天に変更される。溥儀一行が三機の小型機に分乗して奉天に到着すると、飛行場にはソ連機が待っていた。溥儀一族は全員がソ連軍の捕虜となり、ハバロフスクの収容所に連行される。誰が溥儀一行の動きをソ連軍に密告したのか。溥儀一行の行先変更を指示したのは関東軍総司令部だった。

当時、満州では関東軍総司令部がソ連軍と終戦交渉をやっていた。日本側は秦彦三郎総参謀長と瀬島龍三ら三人の参謀だった。この終戦交渉の過程で彼らが溥儀一族をソ連に売ったとみて間違いないだろう。瀬島はソ連に十年間抑留され、帰国してから伊藤忠商事の会長にまでなる。しかし彼は、抑留中に何があったのか一切語っていない。瀬島はソ連のスパイだったのではないか、という説が濃厚に残っている。

ハバロフスクの収容所で溥儀らは満州国の歴史をまとめるように要求される。ソ連当局が溥儀を東京裁判に検察側証人として出廷させ、関東軍幹部を傀儡師に仕立てあげるための準備だった。溥儀は昭和二十一年八月十六日から計八日間、東京裁判の証人席に座り、前述したように「満州国皇帝としての発言は、すべて御用掛の吉岡中将に強制されたものだ」と繰り返した。溥儀は手にしたメモを読み上げるケースも多く、裁判長から「法廷の許可がなければ書いたものを見ることは許されない」と再三、注意される。こうしたソ

連に強要された溥儀の証言は、連日、新聞各紙で大きく報道された。「満州国は日本軍が溥儀を脅して皇帝に祭り上げた傀儡国家」という戦後の日本での定説は、東京裁判での溥儀証言が大きな「役割」を果たしたと言えるだろう。

撫順戦犯管理所と周恩来

中国本土での内戦に勝利した毛沢東の共産党軍が「中華人民共和国」（中国）を建国すると、ソ連との間に「中ソ友好条約」が結ばれる。ソ連軍の捕虜となりハバロフスクの収容所で五年間を過ごした溥儀、溥傑ら満州国関係者約六十人と古海忠之（国務院総務庁次長）ら日本人捕虜九百六十人は、撫順に設置された「戦犯管理所」に送り返される。この管理所の総指揮をとることになったのが周恩来総理で、「国家政策」として「戦犯の思想改造」が行われることになった。

その基本となったのが毛沢東の「改造教育を実践し、正しい考え方・思想を正しい方法で教育すれば人間は変わる」という思想である。戦犯管理所で

溥儀や溥傑に最初に命じられたのが「自伝」を書くという「任務」だった。「思想改造では客観的にこれまでの生き方を反省すべきであり、それには自伝をきちんと書くことだ」という基本方針があった。『わが半生』や『溥傑自伝』はこの改造方針に従って書いた「自伝」が「原典」となっている。

管理所側は絶えず「学習会」を組織、マルクス・レーニン主義の著作を学習させた。頭脳明晰な溥傑はそうした学習を通して、かつての思想と行動を反省し、「共産主義国家・中国」の一員へと変貌をとげ、満州国関係者の「学習組長」に任命される。さらに毎日四時間の労働時間も設定された。そうした一連の教育が終わると、最後に課せられたのが「告白・告発と罪の承認」だった。満州国関係者も日本人捕虜も、互いに自分の罪を告白し、また同僚だった者たちの罪を告発した。

大きな反響を呼んだ日本人の告白は、満州国国務院総務庁次長だった古海忠之の「満州国における日本のアヘン政策」だった。「日本軍は軍費を調達する

ために、満州国民にアヘンの植え付けを奨励、アヘン専売制度を設け、住民にアヘン吸引を勧め、満州国の財政収入の六分の一をアヘンが占めるようになった」などと告白したのである。古海の告白が終わらないうち、日本人戦犯たちの間では野次と怒号が飛び交ったという。

戦犯管理所の「起訴案」では極刑（死刑）が七十人に上っていた。この案を見た周恩来は「日本人には一人の死刑もあってはならず、また一人の無期刑もあってはならない。有期刑もできるだけ少数にすべきである」と強い口調で諭した。この発言に反発が起きると、彼はこう諫めた。「日本人戦犯に対する寛大な処置について、諸君は二十年後にその正しさを理解できるだろう。侵略戦争を行った人たちが十分に反省し、その体験を日本人たちに話せば、われわれ中国共産党員が話すより日本人民も納得するだろう」。日本人に対する判決は起訴された二十八人のうち、古海ら四人が懲役十八年、その他が十六年から十二年の実刑判決だった。この刑期にはソ連抑留の五年間も含まれている。

当時、毛沢東に次ぐナンバー2だった周恩来は十九歳の時、日本の大学に入学することを夢見て来日、神田で下宿生活をしながら日本語を学び、第一高等学校、東京高等師範学校を受験するが、最初の年は入試に失敗する。再度の挑戦を目指して予備校に通いながら読んだのが京都帝国大学教授・河上肇が主宰する雑誌『社会問題研究』だった。周恩来はこの雑誌の熱心な読者になり、「マルクス主義」への理解を深めていったという。当時、中国語に翻訳されたマルクス・エンゲルスの著作はなく、周恩来はまず、日本語で「マルクス主義」に接したのである。

溥傑と浩、十六年ぶりの再会

昭和三十四年九月、溥儀に「特赦令」が伝えられる。「特赦」とは起訴・判決を経ないで出獄することである。溥儀はソ連での五年間、さらに撫順の戦犯管理所で九年間を過ごし、ようやく新中国の公民となった。だが、溥傑の釈放はさらにもう一年、引き延ばしにされる。溥傑は新中国への理解は溥儀以上に進

んでいたが、彼は妻、浩への思いが断切れなかった。溥儀は管理所を出る前夜、溥傑にこう言った。「君の問題は日本人妻のことだと思う。浩は特務（スパイ）に違いない。今回、特赦が許されなかった理由は日本人妻の問題を処理しなかったからだ」。溥傑は涙ながらに溥儀を見送った。溥傑の特赦は翌三十五年十一月のこと。溥傑はソ連抑留五年、撫順の戦犯管理所で十年。通算すれば十五年という長い収容所生活だった。特赦を受けた溥儀は当初、周恩来の斡旋で「北京植物園」で働いていた。溥傑も同じように「景山公園管理处」で働き始める。二人はやがて国政への助言機関である「人民政治協商会議」内に設置された文史資料研究委員会の「文史専門委員」に任命される。二人の仕事は史料を整理し「歴史史料」として残すかどうかを判断することで、二人にはうってつけの職場だった。溥儀、溥傑は清朝に関する資料を審査する責任者に指名される。「満州国」の歴史の著述では、二人はよき協力者になった。

溥傑の特赦を知った妻・浩はすぐに

溥傑あてに手紙を書く。手紙には溥傑に対する思慕の情と中国への帰国を願う思いが込められていた。しかし、浩を日本の「特務」だと思い込んでいた溥儀は浩の帰国に反対する。そんな溥儀を説得し、浩の帰国に協力したのが周恩来だった。浩は溥傑と結婚した際、満州国籍を取得、敗戦後、帰国してからは「在日華僑」として暮らしていた。昭和三十六年五月、浩は次女の婿生と共に香港経由で溥傑が出迎えた広州に向かう。浩の手には天城山で同級生と心中した慧生の遺骨が抱えられていた。二人にとって十六年ぶりの再会だった。

日中国交回復と天皇・皇后の訪中

浩が溥傑と再会して五年後の昭和四十一年、中国では毛沢東による文化大革命が激化する。元満州国皇帝・溥儀は紅衛兵たちの標的となった。体調を崩した溥儀は病院での診察も断られる。周恩来の背後からの援助で何とか入院するが、そこにも紅衛兵は押しかけた。その中には三番目の側室、李玉琴もあり、皇帝時代の溥儀を攻め立てた。溥

儀はそのたびに自己批判を繰り返す。溥儀の体力は日に日に衰え、翌四十二年十月、波乱の生涯を閉じた。享年六十一。最後の言葉は「もう一度、周総理に会いたいなあ」だった。溥傑、浩夫妻も紅衛兵の標的となったが、なんとかその攻撃を切り抜けた。

その頃から中ソ対立が激化、昭和四十七年二月には米国のニクソン大統領が訪中。日本でも一刻も早く中国と国交を結ぶべきだとの声が高まる。九月になると田中角栄首相、大平正芳外相らが訪中する。周恩来首相との間で調印された「日中共同声明」には「過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」と記され、具体的な謝罪の言葉はなかったが、日本はこの調印により台湾との国交を断った。

両国の国交が回復すると、日中間は空路でも結ばれる。周恩来の意向を受け、溥傑・浩夫妻の訪日が実現する。周恩来は日本の皇室と直接対話できるのは溥傑夫妻だとよく知っていた。日

中友好の最終的な実現には天皇・皇后の訪中が必要である。周恩来はその任務を溥傑夫妻に課した。溥傑は全国人民代表大会常務委員会委員となり、来日するたびに天皇・皇后と面会する。その結果、平成四年十月の両陛下（現上皇・上皇后）の訪中が実現した。

日本国内では、両陛下が訪中されれば「歴史に対する謝罪が要求される」として反対の声が強かった。溥傑は事前に来日すると「謝罪の言葉はいりません。謝罪を求めたら親善ではない」と進言する。それが天皇の「両国の永きにわたる歴史において、我が国が中国国民に対し多大の苦難を与えた不幸な一時期がありました。これは私の深い悲しみとするところであります」という天皇のお言葉となったのである。最後になるが、歴史に「IF」はないという。その通りだが、「IF」を考えるのもよいかもしれない。もし終戦時に溥儀、溥傑が当初の計画通り日本に亡命していたら、どんな立場になっていたろう。「天皇と兄弟だ」という人物をGHQのマッカーサー元帥は昭和天

皇と同じように処遇したのだろうか。

歴史にはどこかの瞬間に右に行くのか、左に転ぶのか、といったことがたくさんある。歴史の定説になっていることが、すべて真実とは言えないのではないか。現在、我々が問われていることも多い。ウクライナでの戦争はどういう結末を迎えるのか。新憲法で「戦争をしない国」となった日本は、どう変化していくのか。今、我々は変化する世界の歴史のど真ん中にいると私は思っている。

（2023年6月15日・公開講演会）

筆者略歴（まき ひさし）

1941年大分県生まれ。64年早稲田大学政経学部を卒業、日本経済新聞社に入社。その後、代表取締役副社長を経てテレビ大阪会長。

著書に『「安南王国」の夢―ベトナム独立を支援した日本人』（ウェッジ）、『昭和解体―国鉄分割・民営化30年目の真実』（講談社）、『暴君―新左翼・松崎明に支配されたJR秘史』（小学館）など多数がある。